

吉田彌平高等女学校読本における演習問題の一考察 —書簡文に付された演習問題を中心に—

A study of exercises in Japanese language textbooks
for girls' high school students under the old system of education
edited by Yahei Yoshida with special focus on exercises of letters

中 嶋 真 弓

Mayumi NAKASHIMA

キーワード 吉田彌平、読本、書簡文、演習問題

1. 問題の所在

高等女学校の多くで使用された読本として吉田彌平・小島政吉・篠田利英・岡田正美編『女子国語読本全10巻』（以後、吉田彌平他3名編高女読本全般を示す場合は『吉田高女読本』と記す）がある。『吉田高女読本』は、明治35年から大正13年（訂正18版）の長きにわたり普及した教科書（井上敏夫，1981）である。その『吉田高女読本』の中で、演習問題が付されている読本がある。それは、『再訂女子国語読本』（M39.12.29）の訂正5版から訂正8版である。

そこで、本稿では書簡文に付された演習問題の特徴を通して、書簡文教材の役割について明らかにすることを目的とする。対象とする読本は、以下のものであるが、演習問題は同一のために、『再訂女子国語読本』（M40.11.30訂正8版）を中心に論じることとする。

- ・『再訂女子国語読本』（M39.12.29訂正5版）
- ・『再訂女子国語読本』（M40.4.8訂正6版）
- ・『再訂女子国語読本』（M40.8.27訂正7版）
- ・『再訂女子国語読本』（M40.11.30訂正8版）（以後、訂正8版と記す）

なお、本稿では引用以外は、手紙文を書簡文と記す。

2. 『吉田高女読本』（訂正8版）の演習問題の特徴

訂正8版には、17通の書簡文教材が採録されている。その内訳は以下のようである。なお、1-3は巻1-3課を指し、以下同様である。

- ・巻1 1-3 郷里の友に
1-30 米国よりの通信（岡田みづ子）
- ・巻2 2-6 菊を贈る文

- 2-7 右の返事(菊を贈る文の返事の事 引用者補。以下同様)
- 2-22 田舎の祖母に(樋口夏子 通俗書簡文)
- 2-23 右の返事従妹より(樋口夏子 通俗書簡文)
- 巻3 3-18 人の新盆に(樋口夏子 通俗書簡文)
- 3-26 公子の躰方を申し遣はず(徳川齊昭)
- 巻4 4-10 伯林通信(文学博士 芳賀矢一)
- 4-19 病気見舞の文(樋口夏子 通俗書簡文)
- 巻5 5-3 「世界之無線電信」著者に贈る(島村速雄)
- 巻6 6-7 怒れる友に(竹越与三郎 三叉書簡)
- 巻7 7-3 友なる写真師に(尾崎紅葉 紅葉書翰抄)
- 7-30 妹にさとす(吉田松陰 俗簡襍輯)
- 巻8 8-9 息女に教訓す(烏丸光廣)
- 巻9 9-14 友人より近状を報ぜられし返事(恵磨遜)
- 巻10 10-21 庭の訓(阿仏尼 庭の訓)

総課数が278課であり、書簡文教材の占める割合は6.1% (17/278) である。文体、字体は、候文が中心で、口語文はない。また、行書はなくすべて楷書での提示である。

本章では、訂正8版の書簡文に付された演習問題の特徴を議論する。訂正8版の書簡文教材の演習問題を〈表1〉に整理した。さらに、その演習問題についての内容項目を稿者が設定し、訂正8版の演習問題を内容項目別に〈表2〉に分類した。なお、〈表1〉の3①等は、後述する〈表2〉の内容項目番号で、「3文に関するもの①文の意味」等を指す。

〈表1〉『再訂女子国語読本』(訂正8版)の演習問題

巻 1	<p>◆1-3 郷里の友に(書翰文)</p> <p>(一)「都は春の錦と相成り候」とは如何なる事ぞ。 3①</p> <p>(二)「したゝめ候」を「書き候」としては如何。 2①</p> <p>(三)「動物園の前へまゐりました」の「まゐり」を「あがり」「いき」「いらっしゃい」などと改めたらば、いかに。 2①</p> <p>(四)この文の中に色のとりあはせを面白く寫したる処あり、何処なるか。 1</p> <p>(五)本文の中なる口語を各自に用ふる口語とくらべて異なる処あらば、それを指し示せ。 2②</p> <p>(六)この手紙を郷里の妹に贈るものとせば、前後の候文の処に如何なる修正を加ふべきか。 6①</p> <p>◆1-30 米国よりの通信(書翰文) 岡田みづ子</p> <p>(一)如何なる場合に二十八日が二日あるか。又その理由は如何。 1</p> <p>(二)左の文を口語文にあらためみよ。 3②</p> <p>(三)この文によりて獲たる米国に関する知識を、一つ書きにして、枚挙せよ。 1</p>
--------	--

卷 2	<p>◆2-6.7：6 菊を贈る（書翰文）、7 右の返事（書翰文） (一)左の語句を他の語句にいひかへよ。 2⑥ (二)左の文句を口語に改め、それを草体の文字にて認めよ。 3②、4③</p> <p>◆2-22：田舎の祖母に（書翰文） (一)左の文の用字に誤あらば、改めよ。 2③ (二)左の文句を別の文語に書き換へよ。 2① (三)左の文において附圈の語を去らば、意義の上にかに影響すべきか。 3① (四)本文を口語に改めて、口演せよ。 3②、7</p> <p>◆2-23：右の返事従妹より（書翰文） (一)「まるらせ候」の意を正しく解し、これに従って新に文句を作りて、応用を試みよ。 2⑦、2④ (二)来書「花の頃にも相成り候はば」云々とあり。これに応ずる言葉をこの返事に書き加へみよ。 6④ (三)我が祖母に対して、本文の如く、敬語を用ふるは先方に対して失礼にはあらぬか。 5② (四)本文を友人への返事とせば、いかなる処を如何に改むべきか。 6①</p>
卷 3	<p>◆3-18：人の新盆に (一)左の文の空所を補へ。 2⑤ (二)左の語の異同を弁ぜよ。 2⑥</p> <p>◆3-26：公子の躰方を申し遣はず（書翰文） (一)左の文句を目下より目上にいふ語になほせ。 2① (二)左の文句の意を他の文句にて述べよ。 2① (三)左の文句の誤あらば正せ。 2③</p>
卷 4	<p>◆4-10：伯林通信（書翰文） 文学博士 芳賀矢一 (一)この文によりて新に得たる知識は何々なるか。 1 (二)スエズ運河の開鑿せられざりし時は欧亜の海上の交通は何処によりしか、日数は何日を費やししか。 1 (三)次の文の空所を詰めよ。 2⑤ (四)風俗に関する俚諺をあげよ。 2⑧ (五)「袴を穿つ」に対して「傘を」「服を」「眼鏡を」などの下に適當なる動詞をあてはめよ。 5③ (六)本文の「小生儀・・・安堵仕り候」を普通文に改めよ。 3⑤</p> <p>◆4-19：病氣見舞の文（書翰文） 樋口夏子 (一)次の文の略語を補へ。 5④ (二)次のいひ方の正否を説け。 2③ (三)「病は小愈に加はるとか」といふ句を本文中に挿むとせば、何処が尤も適當なるべきか。 6④ (四)この文を病人への直接の見舞状にせんとするにはいかに改むべきか。 6① (五)次の文字を行書、又は草書に認めよ。 4③</p>

<p>卷 5</p>	<p>◆5-3：「世界之無線電信」著者に贈る（書翰文） (一)本文を三分の一ほどの長さの文にちぢめよ。 6⑥ (二)本文は幾段（又は幾節）に別かち得るか。又その各段（又は各節）の要点は如何。 5⑤、1 (三)日付の下に本文の如く、ある事柄を書き添ふるにつきての注意及び利益の如何。 6③ (四)次の語句の意味を説明し、且つ、それを用ひて一々短文を綴れ。 2⑨、3⑥ (五)本文に句読点を施せ。 5① (六)本文の一節を行書体にて巻紙に認めよ。 4③</p>
<p>卷 6</p>	<p>◆6-7：怒れる友に 竹越与三郎 (一)盛怒せる時、書翰を認むれば、いかなる危険あるか。 1 (二)本文のシェークスピアの語にならひて、同じ形の他の文を作れ。 3⑥ (三)本文を対話語にて口演せよ。 7</p>
<p>卷 7</p>	<p>◆7-3：友なる寫真師に（書翰文） 尾崎紅葉 (一)左の語を漢字にて書け。 2⑩ (二)左の文句の類句を作れ。 2⑫ (三)本文中の明喩・暗喩を指摘せよ。 5⑥ (四)本文を普通の記事文に改めんには、如何なるところを如何に改むべきか。 3⑦ ◆7-30：妹にさとす（書翰文） 吉田松陰 (一)漢詩「不、生不、滅不、垢不、浄不、増不、減」（読本は縦書き。読本でレ点の部分を本稿では読点を入れた 引用者補）、此の文を仮名交り文に改めよ。 3⑧ (二)「塞翁が馬」の話を簡短なる文に綴れ。 3⑥ (三)「楽は苦の種福は禍の本」といふ語を敷衍せよ。 2⑨ (四)左の語の誤を正せ。 2③ (五)本文につきての所感を述べよ。 1</p>
<p>卷 8</p>	<p>◆8-9：息女に教訓す 烏丸光廣 (一)「そもじ幾千代の色もかはらぬ・・・覚えまるらせ候」を、今日の普通の書簡文体に言ひかへよ。 6⑤ (二)左の漢字に仮名を付けよ。 2⑪ (三)本文の第二段より敬語を省き、且つ、それを普通文体に改めよ。 5②、3⑤ (四)本文に対する返事を試に作れ。 6②</p>
<p>卷 9</p>	<p>◆9-14：友人より近況を報ぜられし返事（書翰文）（恵磨遜の書簡） (一)友誼に関する格言の知れる限りを列挙せよ。 2⑧ (二)左の語を解せよ。 2⑨ (三)左の口語を文語に改めよ。 3③</p>
<p>卷 10</p>	<p>◆10-21：「庭の訓」 (一)左の古語を当今の口語に訳しみよ。 2⑬ (二)左の文の意義を説明せよ。 3①</p>

卷 10	(三)左の文句の附圈の語につきて文法上の誤謬の存否を説明せよ。 5⑦ (四)「何の路に」を「大行の路に」「何の流に」を「巫峡の流に」と改めたらば、原文に如何なる変化を生ずるか。 2① (五)本文の各段の大意を表にて示せ。 1
---------	--

【備考】・設問のみ記し、演習問題の中にある「左の～」の問題文は省略した。

演習問題は、71問設定されている。内容の内訳は〈表2〉のようで、1「内容に関するもの」12.7%、2「文句に関するもの」36.6%、3「文に関するもの」19.7%、4「毛筆体に関するもの」3.2%、5「文法に関するもの」11.3%、6「書簡文に関するもの」12.7%、7「口演に関するもの」2.8%である。言葉に関わる内容が最も多く、続いて、文に関するものである。言葉や文という基本的な内容が問われている。さらに2「文句に関するもの」の詳細をみると、2①語句の置き換え8.5%、2③誤り、正否を正す5.6%、2⑨語句の意味4.2%である。3「文に関するもの」の詳細をみると、3①文の意味、3②口語に改める、3⑥短文作りが4.2%である。つまり、言葉や文の基本的な内容が問われているという点において、書簡文を通して、言語知識、言語技能を高める問題が位置付けられているといえる。また、口語に改める等の演習問題もみられることから、書簡文において口語についての意識化がみられる。次に、6「書簡文に関するもの」の内訳をみると、6①宛先変更による修正が4.2%である。宛先を変えて書き換えるものであるが、多様な書簡文に対応できるように設定されていると考えられる。

4「毛筆に関するもの」では、行書または草書に書き換える演習問題が3件(4.2%)みられる。読本においても習字との関連がみられ、さらに書簡文を行書あるいは草書で書くことが求められていることが分かる。しかし、読本には、前述したように行書での提示はなく、すべて楷書である。『吉田高女読本』の変遷からみるならば、M35.1.3発行『女子国語読本』から、訂正8版までにおいて、行書で提示された書簡文は、M39.12.29発行『再訂女子国語読本』の2通のみである。その2通は「菊を贈る文」「右の返事(右とは『菊を贈る文』の書簡を指す 引用者補)」である。しかし、この2通も次に発行されたM40.4.8『再訂女子国語読本』(訂正6版)では楷書となっており、訂正8版までは全ての書簡文は楷書での提示である。さらに付記すれば、T1.10.31発行『三訂女子国語読本』(訂正9版)になると行書の書簡文は7通になり、全体の25.9%と激増することになる。

演習問題の傾向から、書簡文を通して言葉や文の基本的な内容を知識として学び、理解する学習がなされていることが分かる。書簡文が言語知識、言語技能を培う教材として位置付けられていたといえる。また、書簡文の書き換えや習字で書くことの演習問題から、日常生活の多様な場において対応できる書く言語技能が図られるように工夫されていることが看取できる。

中嶋(2019)は、吉田彌平・小島政吉・篠田利英・岡田正美編『女子国語読本実科用全8巻』のM43.12.22、M45.1.17再版、T3.10.28修訂3版、T4.1.13修訂4版にも演習問題が付されており、その中のM45.1.17再版の書簡文の演習問題について言及している。それによれば、1「内容に関するもの」36.4%、2「文句に関するもの」36.4%、3「文に関するもの」9.1%、4「毛筆体

に関するもの」0.0%、5「文法に関するもの」18.2%、6「書簡文に関するもの」0.0%、7「口演に関するもの」0.0%とある。なお、中嶋（2019）には、4「毛筆体に関するもの」の設定はないが、本稿との比較を可能とするために稿者が挿入した。よって、中嶋（2019）との番号を一部変更した。訂正8版と『女子国語読本実科用』（M45.1.17）では、M40とM45との違いはあるものの、書簡文の共通教材が4通ある。数値をみると、実科用においても1「内容に関するもの」36.4%、2「文句に関するもの」36.4%が高い数値であることが分かる。しかし、その一方で、訂正8版のように多様な範囲での問題ではないといえる。つまり、実科高女生はより言葉や内容の理解といった基本的なことが求められているといえるのである。

〈表2〉『再訂女子国語読本』（訂正8版）の演習問題内容項目分類一覧

〈表2〉『再訂女子国語読本』（訂正8版）の演習問題内容項目分類一覧			
No.	内容項目	『再訂女子国語読本』（M40.11.30訂正8版）	
		課番号	問数 割合
1	内容に関するもの	1-3-4,1-30-1,1-30-3,4-10-1,4-10-2,5-3-2,6-7-1,7-30-5,10-21-5	9 12.7% (9/71)
2	文句に関するもの		26 36.6% (26/71)
①	語句の置き換え	1-3-2,1-3-3,2-22-2,3-26-1,3-26-2,10-21-4	6 8.5% (6/71)
②	語句の比較	1-3-5	1 1.4% (1/71)
③	誤り、正否を正す	2-22-1,3-26-3,4-19-2,7-30-4	4 5.6% (4/71)
④	新たに文句を作る	2-23-1	1 1.4% (1/71)
⑤	空所を補う	3-18-1,4-10-3	2 2.8% (2/71)
⑥	語句の異同	2-6.7-1,3-18-2	2 2.8% (2/71)
⑦	読み方と意味	2-23-1	1 1.4% (1/71)
⑧	俚諺	4-10-4,9-14-1	2 2.8% (2/71)
⑨	語句の意味	5-3-4,7-30-3,9-14-2	3 4.2% (3/71)
⑩	漢字を書く	7-3-1	1 1.4% (1/71)
⑪	漢字の読み	8-9-2	1 1.4% (1/71)
⑫	類句を作る	7-3-2	1 1.4% (1/71)
⑬	古語を口語に訳す	10-21-1	1 1.4% (1/71)
3	文に関するもの		14 19.7% (14/71)
①	文の意味	1-3-1,2-22-3,10-21-2	3 4.2% (3/71)
②	口語に改める	1-30-2,2-6.7-3,2-22-4	3 4.2% (3/71)
③	口語を文語に直す	9-14-3	1 1.4% (1/71)
④	平叙文にする		0 0.0% (0/71)
⑤	普通文（普通文体）にする	4-10-6,8-9-3	2 2.8% (2/71)

⑥	短文作り	5-3-4,6-7-2,7-30-2	3	4.2% (3/71)
⑦	普通の記事文	7-3-4	1	1.4% (1/71)
⑧	漢詩を仮名交じり文に改める	7-30-1	1	1.4% (1/71)
4	毛筆体に関するもの		3	4.2% (3/71)
①	全文を毛筆体で写す		0	0.0% (0/71)
②	変体仮名と普通の平仮名を並べて記す		0	0.0% (0/71)
③	(口語体に改めてそれを)草体で書く、文字を行書又は草書に認める。本文の一節を行書にする	2-6.7-3,4-19-5,5-3-6	3	4.2% (3/71)
5	文法に関するもの		8	11.3% (8/71)
①	句読点を打つ	5-3-5	1	1.4% (1/71)
②	敬語	2-23-3,8-9-3	2	2.8% (2/71)
③	動詞	4-10-5	1	1.4% (1/71)
④	略語を補う	4-19-1	1	1.4% (1/71)
⑤	段落	5-3-2	1	1.4% (1/71)
⑥	明暗・暗喩	7-3-3	1	1.4% (1/71)
⑦	文法上の誤謬の存否	10-21-3	1	1.4% (1/71)
⑧	形容詞		0	0.0% (0/71)
⑨	音便		0	0.0% (0/71)
6	書簡文に関するもの		9	12.7% (9/71)
①	宛先変更による修正	1-3-6,2-23-4,4-19-4	3	4.2% (3/71)
②	返事を書く	8-9-4	1	1.4% (1/71)
③	日付の後に付ける文の注意及び利益	5-3-3	1	1.4% (1/71)
④	提示された一文を書簡文に書き加える	2-23-2,4-19-3	2	2.8% (2/71)
⑤	普通の書簡文体に言いかえる	8-9-1	1	1.4% (1/71)
⑥	書簡文を三分の一にちぢめる	5-3-1	1	1.4% (1/71)
7	口演に関するもの	2-22-4,6-7-3	2	2.8% (2/71)
演習問題合計			71	100%

言い換えるならば、高女生は、基本的な内容とともに、多様な言語能力が問われているとみることができる。

それでは、高女生は、どのような書簡文を教材として学んでいるのであろうか。そこで、書簡文として長きにわたり採録されている「田舎の祖母に」の教材について、次の章でみていくこととする。

3. 「田舎の祖母に」(樋口夏子 『通俗書簡文』) の採録の在り方

訂正8版の書簡文の採録教材をみると、女性作者は1-30「米国よりの通信」の岡田みつ子と樋口夏子(樋口一葉のこと 引用者補)である。樋口夏子の書簡文は、2-22「田舎の祖母に」、2-23「右の返事」、3-18「人の新盆に」、4-19「病気見舞の文」の4通で全体の23.5%を占めている。樋口夏子の書簡文の中でも、T13.10.13発行『六訂女子国語読本』まで採録された教材が「田舎の祖母に」である。付記するが、「田舎の祖母に」は、吉田彌平・小島政吉・篠田利英・岡田正美編『女子国語読本実科用全8巻』においても「郷里の祖母へ」という課名で採録され、これも長きにわたり採録されている。「田舎の祖母に」の出典は『通俗書簡文』である。『通俗書簡文』は、明治29年博文館から大橋又太郎著『日用百科全書第貳編通俗書簡文』として刊行された。野口碩(1974)は、通俗書簡文について、次のように述べている。「『通俗書簡文』は引用者補)少なくとも三〇版以上の改訂増刷を重ねた。(中略)初版明治二十九年五月二十五日、再版同年九月、三十年十一月に五版、三十二年五月に十版、四十一年十月に二十五版、四十三年九月に二十九版と、日露戦後までは加速的な伸長を示している。この事実によって、『通俗書簡文』の一葉死後一〇年間における急速な普及ぶりを想像することができる。いわば、隠れたベスト・セラーであった。」(p.114)としている。さらに野口碩(1974)は、『通俗書簡文』の役割について「明治二十三年民法によって規制される家族制度をもつ『家』と、親族集団及び近隣との緊密な連帯関係を基盤とする庶民の家族生活、ならびに中小規模の経営を行なう前近代的商業社会におけるCommunicationを対象として書かれたものであった。初版発刊後一〇年間における急速な普及は、庶民のための文範として十分に貢献したことを物語っている。」(p.119)と記している。女子書簡文の文範として社会的にも活用されていたものであることが看取できる。そして、それが高等女学校や実科高等女学校の教材として採録されたのである。それでは、どのような教材かを採録の変遷も加えながら〈表3〉に整理した。採録の変遷をみるために、『通俗書簡文』の原文、M35.1.3(以後、M35と記す)、M36.10.20(以後、M36と記す)、M39.12.29(以後、M39と記す)、T1.10.31(以後、T1と記す)、T7.7.30(以後、T7と記す)、T10.10.29(以後、T10と記す)発行の『吉田高女読本』の採録文を載せた。

変容をみると、原文とM35では、「お〜」が「御〜」、「居候」が「居り候」になっている。また、原文には句読点や段落分けはないが、M35では句読点や段落分け(〈表3〉の◆印は、段落として行がえがなされている箇所を指す 引用者補)が施されている。さらに、踊り字(くの字点やくの字点の濁点)が使われていないのも特徴である。内容的には、3番「此寒中いかに御凌ぎいらせられ候や伺ひたさに文さし上度」が削除され「御なつかしさ」のみが残り、易しい表記

〈表3〉「田舎の祖母に」(『通俗書簡文』)の採録の変遷

文番号	通俗書簡文	M35	M36	M39
	田舎の祖母に雲中見舞いの文	2-30「田舎の祖母に遺はす文」樋口一葉	2-23「田舎の祖母に贈る文」樋口一葉	2-22「田舎の祖母に」樋口夏子
1	今朝は風はげしう候て北に向きたるは窓さへ明けがたきやうに御座候	今朝は風はげしう候て、北へ向きたるは窓さへ明けがたきやうに御座候。	今朝は風はげしうて、北向の部屋は、窓さへ明けがたきやうに御座候。	今朝は風はげしうて、北向の部屋は、窓すず明けがたきやうに御座候。
2	都のうちさへ此やうの寒さなるをまして山おろしいかばかりかとお入お楽じ申上御座承るべし語りあり居候に	都のうちだにこのやうなる寒さなるを、まして山おろしいかばかりかとお入お楽じ申上げ御座候し居り候。	都のうすすらこのやうなる寒さなるを、まして、山おろし烈しき御地はいかばかりかと、父母ともども御案じ申上げ、御噂致し居り候。	まして、山おろし烈しき御地はいかばかりかと、父母ともども御案じ申上げ、御噂致し居り候。
3	私も余りの御なつかしさと比葉いかに御羨ざいらせられ候や伺ひたさに文さし上度こゝろの中に存じ居候折からゆゑ此度は私にと申こひ候て此文をばはしたゝめ申候	私もあまりの御なつかしさに文さしあげたく、心の中に存じ居り候折ゆゑ、この度は私にと申し請ひ候てこれをば認め申し候。		
4	祖母さまには此寒さに御障りもいらせられずや	◆祖母さまにはこの寒さに御障もいらせられずや。	◆御祖母さまには、この寒さに御障もあらせられず候や。	◆御祖母さまには、この寒さに、御障もあらせられず候や。
5	歳暮に伯父様よりお文給はり候節、いよいよ御健かにて伯母様さへ御及びなきほど家内の御用お氣かゝるに遊ばさるゝよし承り父母はじめ私も嬉しう嬉しうの時は兄こと御地へお迎ひに参り御さそひ申候て上野隅田川の人の出御目にかくる事もかなふべくと一同いさみち居候	歳暮に伯父様よりお文給はり候節、いよいよ御健かにて伯母様も御及びなきほど家内の御用お氣かゝるに遊ばさるゝよし承り、父母はじめ私も嬉しう嬉しう、この春花の時は兄こと御地へお迎ひに参り御誘ひ申して上野隅田川の人の出御目にかくることも叶ふべしと一同いさみ立ち居り候。	歳暮に伯父様よりお文給はり候ひし節、相変はらず御健かにて、伯母様も御及びなきほど、御内の御用お氣かゝるに遊ばさるゝよし承り、父母はじめ私も嬉しう嬉しう存じ上げ、花の頃にも相成り候はば、兄こと御地へお迎ひに参り、御誘ひ申して、上野、向島の入出御目にかくることも叶ふべしと、一同いさみ居り候。	歳暮に、伯父様よりお文たまたまはり候ひし節、相変はらず御健かにて、伯母様も御及びなきほど、御内の御用お氣かゝるに遊ばさるゝよし承り、父母はじめ私も嬉しう嬉しう存じ上げ、花の頃にも相成り候はば、兄こと御地へお迎ひに参り、御誘ひ申して、上野、向島の入出御目にかくることも叶ふべしと、一同いさみ居り候。
6	今十日ほどにて寒は明け候へど余寒は猶さるものと	今十日ほどにて寒は明け候へど余寒は猶さるものと	今十日ほどにて寒は明け候へど、余寒は猶さるものと	今十日ほどにて寒は明け候へど、余寒はなおさるものと
7	御身御大切に風引き給はぬやう遊ばされ度々々こののみを願ひ居候	御身御大切に風引き給はぬやう遊ばされたく、ただこののみを願ひ居り候。	御身御大切に、風引き給はぬやう遊ばされたく、ただこののみを願ひ居り候。	御身御大切に、御風召し給はぬやう遊ばされたく、ただこののみを願ひ居り候。
8	をかきかたならぬ私ど私こしらへし細衣小包便にてお送り申候間着衣のしたにお重ね下され度	◆をかきかたならぬと、私こしらへし細衣、小包便にて御送り申し候間御召しの下にお重ね下されたく候。	◆つたなき出来なれど、私こしらへし細入、小包便にて御送り申し候間、御召しの下にお重ね下されたく候。	◆つたなき出来には候へど、私こしらへし細入、小包郵便にて御送り申し候間、御召しの下にお重ね下されたく候。
9	母よりは栄太郎の梅ぼし上し候	母よりは例のkastera差し上げ候。	母よりは、例のkastera差し上げ候。	母よりは例のkastera差し上げ候。
10	いづれも二三日うちには著き申べく候	いづれも二三日うちには著き申すべく候。	いづれも二三日うちには著き申すべく候。	いづれも二三日うちには著き申すべく候。
11	東京にては誰れも変はることなしに	◆東京にては誰れも誰れもかほることなく候。	◆当地にては、誰れも誰れもかほることなく候。	◆当地にては、誰れも誰れもかほることなく候。
12	父はかねて薄々申上置しお役がへ新年甲々御座候ひしまゝ	父はかねてうすうす申上げ置きしお役替、昨年おしつまりて御座候ひしまゝ	父はかねてうすうす申上げ置きし通り、昨年おしつまりて昇進致し候、	父は、昨年、おしつまりて、昇進致し候。
13	御喜び下さり度	御喜び下さりたく候。	御喜び下さりたく候。	御喜び下さりたく候。
14	これは御年始状さし出し候節申上へべきを遅れにければ其方よりの言ひつけに御座候	これは御年始状さし出し候節申上へべきかりしを、つひつべし候らしたれば其の方よりの申しつけに御座候。	これは御年始状さし出し候ひし節、申上へべきかりしを、つひつべし候らしたれば、其の方よりの申しつけに御座候。	これは御年始状さし出し候ひし節、申上へべきかりしを、つひつべし候らしたれば、其の方よりの申しつけに御座候。
15	誰君さまにも宜しくと申し納め候	どなたさまにも宜しくと申し納め候。	どなたさまにも宜しくと申し納め候。	どなたさまにも宜しく御申し上げ下されたく候。
16	かしこ	かしこ。	かしこ。	かしこ。

文番号	T1 2-23 「田舎の祖母に」樋口夏子	T7 2-14 「田舎の祖母に」樋口夏子	T10 2-18 「田舎の祖母に」樋口一葉	【参考】 右の返事 従妹より 樋口夏子 御もとりすきにござい申候。私学校より帰り、未だ 御もとりありあへぬを、御祖母様いそはれしう膝もとへ呼 寄せ給ひ、此の文讀むべき様御仰せられ候ゆゑ、いそぎ 読みまらせ候へば、誠に御おんうれしき御様子にて、 今一度と仰せられ候まゝ、繰りかえし／＼読聞かせま らせ候。誠に御下され候如く、今年の寒さは近 年になきやうに候へど、御祖母様の御勢のよきこと、 とてまゝ私どもは及び申さず候。御耳は少し遠くなり給 ひしやうなれど、それは長春のしるしと人々申候まゝ、 おおせ下さるまじく候。寒さの御障りなどは少しもな く、毎朝霜を踏みて、村はづれの地蔵さまに日参のお 勤めかゝさず遊ばされ候。／＼細人お働り下され候よし をいたくお喜び遊ばされ候。折簡来合せ候隣家の人々に吹 聴なされて、大御自慢に御座候。／＼かねての御好物と て、カステラ待ちわび給ひて、明日は着くべきか、明 後日かなど申され候。父よりも母よりも、別けて御祖 母様よりも、御礼山のやうに御座候へども、私の筆足 り申さず候。よろしく御推量下されたく候。／＼末にな り候へども、叔父さま御昇進遊ばされし由、私方まで 光のそはるやうにて、嬉しく存上候。御祖母様は早速 御地蔵さまへ御供餅を御納め遊ばさるゝ音に御座候。 品物到着の上は、改めて御請申上ぐべく候へど、まづ は取敢はず、御返事まで。かしこ。 (画伝書簡文) * 参考として、T1の「田舎の祖母に」の返事として 採録されている「右の返事従妹より」を上記に載せた。 なお、「右の返事従妹より」は、T7からは、削除され 往信の「田舎の祖母に」のみの採録となっている。
1	今朝は風はげしくて、北向の部屋は窓すら明け難きやうに御座候。	今朝は風はげしくて、北向の部屋は窓すら明け難きやうに御座候。	今朝は風はげしくて、北向の部屋は窓すら明け難きやうに御座候。	
2	山おろし烈しき御地はいかばかりかと、父母とも／＼御案じ申上げ、御噂致居候。	山おろし烈しき御地はいかばかりかと、父母とも／＼御案じ申上げ、御噂致居候。	山おろし烈しき御地はいかばかりかと、父母とも／＼御案じ申上げ、御噂致居候。	
3	◆御祖母様には、この寒さに、御障もあらせられず候や。	◆御祖母様には、この寒さに御障もあらせられず候や。	◆御祖母様には、この寒さに御障もあらせられず候や。	
4	歳暮に、伯父様よりお文たまはり候ひし節、相変らず御健かにて、伯母様も御及びなまきほど御内の御用何くれと遊ばさるゝ由承り、父母はじめ私どもも、嬉しう存じ上げ、花の頃にも相成候はゞ、兄こと御地へお迎へに参り、御誘ひ申して、上野・向島の入出御目にかくることゝ致したく、一同待居り候。	歳暮に、伯父様より御文たまはり候ひし節、相変らず御健かにて、伯母様も御及びなまきほど御内の御用何くれと遊ばさるゝ由承り、父母はじめ私どもも、嬉しう存じ上げ、花の頃にも相成候はゞ、兄こと御地へお迎へに参り、御誘ひ申して、上野・向島の入出御目にかくることゝ致したく、一同待居り候。	歳暮に、伯父様より御文たまはり候ひし節、相変らず御健かにて、伯母様も御及びなまきほど御内の御用何くれと遊ばさるゝ由承り、父母はじめ私どもも、嬉しう存じ上げ、花の頃にも相成候はゞ、兄こと御地へお迎へに参り、御誘ひ申して、上野・向島の入出御目にかくることゝ致したく、一同待居り候。	
5	なほ一月ほどの間は寒さはなほ／＼加り申すべしとか、何とぞ御身御大切に、御風召したまはぬやう遊ばされたく、たゞこのみ願ひ居候。	なほ一月ほどの間は寒さはなほ／＼加り申すべしとか、何とぞ御身御大切に、御風召したまはぬやう遊ばされたく、たゞこのみ願ひ居候。	なほ一月ほどの間は寒さはなほ／＼加り申すべしとか、何とぞ御身御大切に、御風召したまはぬやう遊ばされたく、たゞこのみ願ひ居候。	
6	◆つたなき出来には候へど、私仕立て候縮入、小包郵便にて御送り申候間、御召しの下にお重ね下されたく候。	◆つたなき出来には候へど、私仕立て候縮入、小包郵便にて御送り申候間、御召しの下にお重ね下されたく候。	◆つたなき出来には候へど、私仕立て候縮入、小包郵便にて御送り申候間、御召しの下にお重ね下されたく候。	
7	母よりは例のカステラ差上げ候。	母よりは例の羊羹差上げ候。	母よりは例の羊羹差上げ候。	
8	いづれも二三日うちには着き申すべく候。	いづれも二三日うちには着き申すべく候。	いづれも二三日うちには着き申すべく候。	
9	◆当地にては、誰も／＼かはることなく候。	◆当地にては、誰も／＼かはることなく候。	◆当地にては、誰も／＼かはることなく候。	
10	父は昨年おしつまりて、昇進致候。	父は昨年おしつまりて昇進致候。	父は昨年おしつまりて昇進致候。	
11	御喜び下されたく候。	御喜び下されたく候。	御喜び下されたく候。	
12	これは、御年始状さし出し候ひし節、申上ぐべかりしを、つい洩したれば、其の方よりの申しつけに御座候。	これは、御年始状さし出し候ひし節、申上ぐべかりしを、つい洩したれば、其の方よりの申しつけに御座候。	これは、御年始状差出し候ひし節、申上ぐべかりしを、つい洩したれば、其の方よりの申しつけに御座候。	
13	どなたさまにも宜しく御申上げ下されたく候。	どなたさまにも宜しく御申上げ下されたく候。	どなたさまにも宜しく申上げ下されたく候。	
14	かしこ。	かしこ。	かしこ。	
15	【備考】・文番号は、M39を基にした。◆印は、段落がえを示したものである。・くの字点は、／＼と／＼で記した。・原文の漢字の読み仮名は省略した。			
16				

になっている。9番の「栄太郎の梅ぼし」は、「カステラ」となり、T7では「羊羹」と変化している。次はM35とM36の教材文の比較では、M36は、M35に比べ、読点が多く施されている。3番の「私もあまりの御なつかしさに文さしあげたく、心の中に存じ居り候折柄ゆゑ、この度は私にと申し請ひ候うてこれをば認め申し候。」が削除され、「御祖母さまには～」と、祖母の様子について書かれている。表記において1番「風ははげしうて、北向きの部屋は」、5番「嬉しう嬉しう存じ上げ」、「昇進致し候、御喜び下されたく候」等、文を整理し、分かりやすい表記になっている。また、「綿衣」が「綿入」、「小包便」が「小包郵便」、「カステラ」が「カステラ」となっている。内容的には、昇進という表現によって、内容が伝わりやすくなったといえる。M36とM39では、作者が、樋口一葉から樋口夏子となっている。また、1番「さへ」が「すら」に、15番の「どなたさまにも宜しくと申し納め候」が「どなたさまにも宜しく御申し上げ下されたく候」になっている。内容的には、2番の「都のうちすらこのやうなる寒さなるを、」を削除し、「まして、～」としている。また12番は、昇進の部分が簡略化されている。M39とT1では、「致し居り候」が「致居候」、「差し上げ候」が「差上候」、「申し上げべかりしを」が「申上ぐべかりしを」等、送り仮名が省略されることが多くなっている。また、漢字、送り仮名の表記が「著」が「着」に、「誰れも」が「誰も」となっている。さらに、くの字点が多く使われている。T1とT7では、「致居候」が「致し居り候」、「差上候」が「差上げ候」となり、前回の採録に戻った感がある。ここでは、今までカステラであったものが、羊羹に変わっている。T7とT10では、作者が樋口夏子に戻っていることと、14番の「さし出し」が「差出し」に変わっている点のみである。

高女生は、このような書簡文を通して、前述したような言語能力を培っているのである。「田舎の祖母に」の演習問題は〈表1〉に示したが、『女子国語読本実科用』の演習問題は「『郷里の祖母へ』の文の二家の親族の関係を言へ。」で内容項目分類でいえば「1内容に関するもの」である。これらの問題を比較するにおいても、訂正8版がより詳細な部分を問題としていることが看取できる。

4. 考察

吉田彌平他3名編『吉田高女読本』の演習問題の傾向から書簡文の役割について議論してきたが、次の事柄が明らかになった。

- ・書簡文教材を通して、基本的な言葉や文の理解を図ることができるようにしている。つまり、書簡文教材が、言語知識の育成を図る役割を担っている。
- ・書簡文の書き換えや習字との関連から、書簡文が書く言語技能育成の役割を担っている。

書簡文が言語知識、言語技能を育成する教材としての役割を有しているという点において、今後、言語能力の面から書簡文教材をみていく必要があると考えている。また、当時の書簡文指導の在り方を、各高等女学校の教育課程や研究報告文書から明らかにする必要があると考えている。

引用・参考文献

井上敏夫（1981）『国語教育史資料第二巻教科書史』東京法令出版

榊原千鶴（2011）「女子用書簡文範の龍頭と軍記物語—『通俗書簡文』を手がかりとして—」日本文学協会『日本文学』60（7），44-52.

中嶋真弓（2019）「実科高等女学校にみる書簡文教材の一考察—吉田彌平他3名編『女子国語読本実科用』を中心に—」愛知淑徳大学文学部論集編集委員会『愛知淑徳大学論集—文学部—第44号』，99—110.

野口碩（1974）「『通俗書簡文』をめぐって」『国文学解釈と鑑賞』39（13），114-120.